

俳諧十二律
春



魏公子年秦人應候二教云夫貴時
不望富比富九、至以富于不求深
肉比深肉自至深肉是時、不取
驕者、自至驕者不約死亡
上至死亡必至劫平原君聞之
歎息不



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as ghostly cursive script.]

洞天

筑前福岡人柏原氏名親雄通稱良作別号松頂軒又盤古住于霞関屋敷

一具

羽州最上人名愚春号一具庵住陸奥福嶋大圓寺隱居于江戸中橋御油座屋敷

碓嶺

上州坂本人仁井田氏別号小蓑庵又柳屋住于江戸本町一丁目

茶靜

江戸西久保人井上氏通稱清七別号雪水軒又竹樹軒覺睡

史千

哉後人古川氏名義利別号梅壺中又蓬窓又芦菴住于江戸芝切通

素芯

加州金澤人櫻井氏名宣弘初稱雪雄後改号梅室別号寒松庵又万圓隱居住于江戸横町

凡例

一 祖翁の高才何某号を世に十哲と稱して

各一家の凡ありといへども皆翁の玄面目

を失せざるも好や百年の今蕉門の一流

よかいては一家をなせるも好少なるも

も亦各古よひもむそかよ是を論すれは

強弱ありといへども律相まうはるるに

いま持をて此集の名をいふはこおゆえん

一巻中は十二人より東國の風土をあげし
海内よりわけて見る事あり

一此集よりわけてみる事あり
續十二人の編よりみる事あり

史十識

十二律目録 正月の部

元日 初日 初鶏 初春 掃初

と初春 法代春 花の春 門松 松飾 松の内

太箸 蓬菜 喰積 菡固 稻積 恵方 年玉 編飾

子日 羽子 小松曳 福寿草 七艸

菫若菜 仏の堂 九義虫 八の法持り 春兩草丸

藪入 正月 陸月 春を余を春好春 淡香

梅 八丁 柳 九丁 落春 土筆 木比芽

河苔 白魚 蛭 猫 十丁 鶯 十一丁 春雀 春の山

春の水 春の山 霞 十一丁 湯を暖 春の山 十二丁

え口や我宗を昔おまはる

茶耕

え口のちろおまへ

洞天

え口やし二口とまはると

素志

初日

ふりほと一雨あつて初日お出

史子

初日さきりけり人位谷同ま

ろ布

初野特とつま

初野

初野は池のまとも怒りまあり

ろ布

まつ春やうまのりぬおふ

一蕙

挿初や礼志来のけけろ先

日人

宇朝の春

清代の春

言つ事らんよまててまのま

雑令

ろら袋ふ二々志白よを初め春

一蕙

清代のま旅 信とゆなむ色新

ろ

さむらひ

さむらひ 扱むつう 花のま 一具

梁 子 絶わう ぎやう 毛れま 八束

四 五 雲の 縁も 白く 糸のま 一蕙

六 門 杏 松餅

松の内

か 松や 松を ぎやう 毛れま 史子

七 雲の 毛れま 香の 白く 糸のま 一色

深 淵を ぎやう 毛れま 花のま や松餅り 々

皆 啼や ぎやう 毛れま 花のま 内 雑令

そ ぎやう 毛れま 花のま や松のうら 久藏

八 雲の 毛れま

太 美を 毛れま 著まう ぎやう 史子

太 げ ぎやう 毛れま 花のま 内 茶静

遠 菜

遠 菜や 雨戸 毛れま 花のま 一色

寶積 惠固

寶積やほつりて空なる日れ
う布

蓮の光や脚^こと見^みり^り二の若
八束

梅積

梅や此の先^まて^まて^ま後
う布

可^かく^く久^く家^か内^{うち}へ^へう^う修^{しゆ}る^る事^{こと}
八束

如 惠方 編 碁

如 玉

守^{まも}り^りと^とく^くま^まを^をた^たて^てあ^あら^らる^る魚^いの^いこ
洞天

勢^{せい}碁^ぎの^の夜^よの^の車^{くるま}を^を柱^{はしら}に^にれ
碁合

そ^その^の玉^{たま}の^の水^{みづ}も^も水^{みづ}に^に回^{まわ}る^る事^{こと}
う布

翠 小日 小松 曳

羽子

子^これ^れ日^ひ々^々と^と空^{そら}を^を飛^とぶ^ぶ息^{いき}子^こ哉^や
う布

冬^{ふゆ}の^の衣^えを^を脱^ぬぎ^ぎて^て男^{おとこ}の^の足^{あし}に^に小^こ松^{まつ}を^を引^ひく^く
素志

冬^{ふゆ}の^の衣^えを^を脱^ぬぎ^ぎて^て男^{おとこ}の^の足^{あし}に^に小^こ松^{まつ}を^を引^ひく^く
う布

種... 一

福壽草

福壽草... 素心

子... 日人

七草

種... 史十

子... 可布

種... 可布

佛生

種... 風朗

子... 八菜

種... 一

子... 麦心

種... 々

子... 可布

種... 可布

たきもやきもさうの夕煙り
ハ菜
表越しよるのちろくもんねし
史子

佛後

清ぼりのうらみくさやきれうへ
久藏
みづもや暮思てぬくちちほ
碓令
おさぐや菴のたか倒のちほしん
風朗
おぼりくゆ体なくも園きあう
日人

そら雨

流せしとえゆるけありまねる
風朗
まきおめしええう春の雨
一蕙
まきやめしやまき油山
洞天

覚悟

けし雨のおもよなまやねます
史子
まき雨のちろくつれは流流哉
風朗

春風 ちか

日人
日人

はもつてもまゝにまゝに小まゝに 茶靜

そこの今にまゝのまゝにまゝに 確令

春の尾のまゝにまゝにまゝに 原靜

初まゝのまゝにまゝにまゝに 川天

初凡や枝々下は古繩よ 史子

菓のまゝにまゝにまゝに 久臧

新入のまゝにまゝにまゝに 風朗

新入のまゝにまゝにまゝに 風朗

新入や小世まゝのまゝにまゝに 久臧

正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月

正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月

正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月

正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月

正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月

正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月

正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月 正月

甚多 甚少 甚多 甚少

春 一 荒 松 の 花

之 不 知 其 名 也

其 花 之 大 者 一 枝 有 十 餘 葉 矣

其 花 之 小 者 一 枝 有 數 葉 耳

其 花 之 中 間 者 一 枝 有 數 葉 耳

其 花 之 最 大 者 一 枝 有 數 葉 耳

梅

梅 之 花 一 枝 有 數 葉 耳

其 花 之 中 間 者 一 枝 有 數 葉 耳

其 花 之 小 者 一 枝 有 數 葉 耳

其 花 之 最 大 者 一 枝 有 數 葉 耳

其 花 之 中 間 者 一 枝 有 數 葉 耳

其 花 之 小 者 一 枝 有 數 葉 耳

一寸 七 分 之 中 間 者 一 枝 有 數 葉 耳

ゆきまきさしすや梅の花 一巻

うららかにさす梅の花 伊弉

我侘なうらあしもうえ花 史子

夜中さすさくくりに梅の花 唯令

梅打て端もなれぬ藪うな 一巻

うえうもやいつまてうのあしに 四人

三年越えてもほめやうえのこ 一巻

節のまゆやうおさぬ梅の花 巻末

糸のやまを舞入る梅の花 う布

枯葉かつら枝もうえ花 洞天

梅のやうしてさすや梅の花 伊弉

柳

えがろしと梅えりさすさし 素心

果換とつんく延れ柳の花 茶肆

又まよらるれ續く梅うな 四人

一村の尻えよ作く柳ま 洞天

ううげき 柿きし の柳うな 素心

菱川の巾うさるぬく柳れ 八条

日うけくお唯かきうあ即やなきし 久臧

おのくまのえゆぬ柳う布 雑令

手なせそ溪河へ度く柳哉 茶肆

柳えくぬれと淋しき子けし う布

二人しくさわく進んる柳うぬ 日人

云ふ本地自らきぬ柳う布 史子

と本けれと菱くまかぬ柳哉 素心

まうつぎれ二月うまきさ柳う 吟詞

落の産ををひしる白いられ 久臧

中あう急まきんや之後の産 吟朗

飛下りて上りそめき 落の産 史子

えて垂く披くまやん 落の産 素心

木芽 土筆

後まればむりて橋本の芽ま

史子

あふまむの親の葉よふふ本のあ

、

あゝまゝの家ひつくちのま井

茶肆

今一度きうううをほくく

一葉

海苔

山ほく来ては苔のまむら

素心

かみあゝもーあゝあゝあゝ

日人

ふ魚

まゝ魚のまゝと魚てなありよあり

浮胡

舞百あまゝ魚まゆはるまなり

素心

観

観とうかてもたはや川の湖

日人

あゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

史子

猫恋

田取うまほひさきん猫の悪 風朗

かきくやきぬひの猫はま 八束

ねころの猫やわらぬ猫の忠 洞天

一まの思ひよ老一男猫うね 素志

ねもなきふれやうね猫はこい 日人

まらねくもいねし事男猫は 史千

まぬねもまう取も啼て猫の悪 唯令

通い来く此家の猫とあうまう 号朗

降り吹よちをきてひやうれ猫 洞天

まはまやうつり止一猫の忠 茶抄

猫のまう人まをまらう後天 一を

管

よくやう伺うくいすま奥の中 素志

まもやまのまらぬまを啼てお 八束

まの後屋てまきまう奈高の町 一蒸

うますや木履そくるままきくま 洞天

あまのうきすまなふあそび 風朗

あまのうきすまなふあそび 史子

あまのうきすまなふあそび 茶好

あまのうきすまなふあそび 一葉

あまのうきすまなふあそび 久藏

あまのうきすまなふあそび 仰天

あまのうきすまなふあそび 可布

あまのうきすまなふあそび 一色

あまのうきすまなふあそび
あまのうきすまなふあそび
あまのうきすまなふあそび

あまのうきすまなふあそび 茶好

あまのうきすまなふあそび 素花

あまのうきすまなふあそび 史子

あまのうきすまなふあそび 仰天

あまのうきすまなふあそび 日人

あまのうきすまなふあそび 風朗

あまのうきすまなふあそび 一葉

まは来一軒池よん〜啼 八茶

う〜すやこ〜の〜ち〜る 風吟

まよま〜の〜ら〜る〜る 碓令

ま〜の〜二〜を〜る〜る 風朗

ま〜る〜る〜る〜る 洞天

ま〜る〜る〜る〜る 茶静

ま〜る〜る〜る〜る 素志

ま〜る〜る〜る〜る

ま〜る〜る〜る〜る 碓令

ま〜る〜る〜る〜る 風吟

ま〜る〜る〜る〜る 風朗

ま〜る〜る〜る〜る 洞天

ま〜る〜る〜る〜る 茶静

ま〜る〜る〜る〜る 素志

ま〜る〜る〜る〜る

ま〜る〜る〜る〜る 碓令

まめ水

川ありそらゆりまめ水 川天

岩鼻て雀啼うそぶめ水 一蕙

湖の中もえゆるはらめ水 茶静

たしなみの波うねりまめ水 日入

苔の種あそむる春はめ水 妻志

めめ水

まの種まこゆる水めめ水かな 一蕙

糸のあそむるを離してめめ水 うち

霞

奉納の松植めりすまめ水 唯令

山寺の種うねるまめ水かな 久臧

うてはらてまめ水かなめ水 八奈

親船のり燈すまめ水かな 茶静

糸垣のめ捕りまめ水かな 一蕙

空向く子供射る霞かな 雪助

好菊又なる子母也 碁盤割 一也

好心也 大雁 茶静

一もたふたむと 碁の松 一也

好心也 碁の女は 史子

好心也 碁の女は 志志

好心也 碁の女は 碁令

陽也 暁

好心也 碁の女は 一也

好心也 碁の女は 一也

好心也 碁の女は 一也

七 果

好心也 碁の女は 一也

好心也 碁の女は 一也

好心也 碁の女は 一也

碁

好心也 碁の女は 一也

鷺や七カ通に小松原 史子

玄身

玄身やおのつ月日を子よ懐了 准令

草れ戸下しをよ袋をよゆけを 八条

巢のゆよあつた知恵付ぬしをよ子 風朗

二月部

二月 きららるる

二日 亥

霞もも荒さるる疎かた二月哉 准令

湖を兄す家書院の二月哉 茶静

きりぎりすや海へあてきりぎりす 風朗

想葉の翹きてみくら二月哉 仰天

春の月

まは月さかろてて一角田川

茶静

まはちちちてててのまの月

唯令

残入の月一人さやそおの月

史千

娘の中まの満月もてり

一具

朧月

まは夜や持るるの朧月

素志

今もさらさらまはるる朧月

茶静

まは生さほほるる朧月

川天

まはきり朧月夜にぬる車

風朗

涅槃

俗と言つて俗も近し涅槃像

一色

まはろよく赫まの影をねてん像

茶静

切甲

切甲や柿の木越してはるる

雪次

評判の甲あはるるは仕じきり

う布

二替り出代

鯨提ちてすやせの二代り

茶静

小重升のたを押しで二代り

風朗

出代の一連来るや髪結床

仰天

日長

永き日も鯨とて海の数主

日人

おろくと境をちりけて日れも記

茶静

おろくもけり日せしやちよる

碓令

永記はやあらや姫のるるる

久臧

もきはけ永きまはも峰の月

旧天

永き日のカッお持きとゆなま

八束

なう記はけ永き豊るはきまうり

風朗

日れ延るまはきまゆる浪向う都

碓令

苗代

碓令

苗代よ新きりまは終度るれ

碓令

苗代や茶梳握く一光うり

史子

椿

三月廿二月廿廿廿一 椿之な 一色
 椿見のゆきやいふや 流椿 河天
 流くく庭の椿のまげろしよ 史子
 一過り咲て又く 椿ろ車 碓令
 一し枝ろけくけえて流椿 風朗
 恒一重うらな小きき 椿ろれ 一蕙
 人の心を入らうふや 流椿 久臧

菜の花

菜のむや花根の寝時を 猫 素志
 鷹の道も鷹も菜のむいけ哉 ち布
 菜の花やまよ新さすあはぬて 碓令
 花畑吹や菜のむのむ折向て 風朗

初花初桜

初花は三流りさめり 園えきり 八条
 あはれ本もえりつゆさう初桜

おぼろぎに裸をまややお中とと
ろ布

山焼

宿曳ろとえらるるお中ととを焼
一巻

跡を焼くやまのつらみえゆか
ろ臧

和午

送るして度お中とと参りし
ろ布

初午や伴のもしとを替る
碓台

蝶

蝶のぬえきおきしながれ
ろ布

蝶おちや土子の子供に足
史子

蝶おちや俄よせお中とと
茶辞

蝶おちや細の地息お立らる
一巻

帰鷹

追はねるをまねるやまの
風朗

下法提しけりまの
史子

来はねるをまねるやまの
碓台

里越て来て連之ぬまの厚 久臧

一免くくめくつ〜のゆるり 史子

別とく村耳よ入ぬられ茶 素苾

らの端を切りぬれなくもかな 茶静

蛙

曳とあし葉よひ〜〜地うぬ 茶静

こらねさすや地の咽け下 風朗

根口の〜落て息する地うま 素苾

らく〜ゆよは延すや浮地 史子

く〜きねのげ〜かの奥や初地 風朗

浮替くえて〜啼出す地うし 洞天

地子の眼に〜たうりて月ねさ 八奈

蜂巣地虫

け〜まよさせ〜蜂の古葉うま 久臧

そ〜あぢせえ〜は眼ヶ地虫穴 日人

春草

緑香も賣きぬていなしきれ草

風朗

壁代言やいつもれしよきれ草

一々

船頭の小粒なくくつまの草

八奈

川魚りやちをさしく春の草

河天

三月初

以于

いともうらぬきてぬふきほてん

久臧

まよ碎ふちろをられし以てな

八奈

以てて餅カサまれうち法活ま

風朗

ハ丈もろくまよま以てれ

茶静

物れと思ふれあかきほてん

素志

雛

事急よ日暮る 雛の座あは 稚令

襦かろ雛よまうてよにこ 久減

雛遊びつゝ泣きおちまよる 史千

雛のお抱て来と子う上座よ 日人

雛抱ておし子を抱ておしる ち布

おの雛仗よしくえせよちり 八采

賣買よおわいえをえし雛うね 風朗

ほとよこてもさぬ雛ゆ ち布

妻お月さすや四の雛お新 茶肆

鶯

およひつらうをさる 鶯のそれ 公茶

百本よ一本ふし鶯おむ ち布

ほとよ芽もひらけ鶯のふ 史子

鶯おとそよと志てと笑わぶ 風朗

鶉合

志うして抱んくねや野合 う布

ほととぎすよ何と云ふけとを合 久臧

櫻 史子

黄巻や杉を抱込んささく 素心

撰すよもねしれを教ふちる櫻 史子

留る人々きつなうちさけさく 久臧

その中を木の下のすゝめ櫻うれ 日人

人のおきやうな櫻れらうなうれ 茶静

笑うして喜ぶ心ささくはささく哉 一冬

高きうへちさけうう咲く櫻をな う布

人きかたそ一ゆきふしちささく 素心

まさけううてもえよつな櫻うね 日人

ちうほくと文ね来うてちる櫻 史子

ね櫻やそこまてまを妹を帯 ハ奈

あうはる村きよなをねけさうれ 風朗

花のやえ越しのきよな櫻うな 洞天

花

又もせぬうらみさけねの歌

風朗

私一や人う眼はくむの心

一色

笑やふもけきさふの休と哉

一蕙

ふれはよも歌ふぬや花の風

う布

おほはうらえもく入ぬもの奥

妻志

一二本かそいで果々ふれ申

唯令

ふる常は善物うぬと歌の意

史子

言ほはれ我衾なるおほけを

茶静

解を足をと板よきうや花度り

日人

系うて返くや志つくまの世

旧天

むね申程かろしむか養う歌

一冬

みま人のうしろえせうむね心

一蕙

誠を神よちをむねあうらう

いふうしてましそ我を花の井

久憾

まこ花よきうて人まき山海なる

唯令

いさふれき日はあぢもを咲よる

風詠

咲く花の口咲もれちりり

史子

菱系下もつをほらちやうよ

茶持

陰すれそ花七日て古なるこころ

日人

人短くいつをくすやその奥

洞天

花色そゆるくとはれ果よき寸

久臧

むをえもえもせぬ入るまじきう

八奈

むの戸を風をせく本も栞う都

う布

折る花もよえゆる二さう街

一色

花咲て位ももたやゆる寸

洞天

を盡り今もいかにの冷

茶持

喧嘩も越のほとあぢや下

一蕙

赤と我同よきゆふ月あうね

風朗

秋宿を栞えて来てむか申

唯令

大風の風こころらう花盡り

史子

花えぬ人よとはさむえうれ

一蕙

花は内忘れて花はやけりぬし

洞天

三日發くお内おちもさ見えな

日人

糸をえし人を麻の蔭かへ

久臧

禪門のむ見はあてり常句れ

一蕙

見えそひる糸はいそくや花の中

素心

漫くく夕月やむねえ

史子

松の花

松の吹ふちきりおのど

甘ききりおのど

松のむきや高く静なり

茶静

ひよるの葉よつねあり松の糸

八糸

草

鉄の又は草をおおて子を連て

素心

帯をを解くや草れらのう

可布

すくも跡よえれをを言ををい

一蕙

岩車曳て持んうるそをれ草

日人

蔓草や帯のさしをきりて指 八条

躑躅

ほくほく笑まほの庭や自然花 一巻

ふきよけしきもおちりて哉 史子

山吹

山吹の笑起しやし何難 史子

山吹や點は豆の重きなり 風朗

連翹 海棠

木瓜

連翹トシや鉢の子入よゆる門 一巻

海棠や去つそり人のあはれ 史子

焼けてる燗のけしや木瓜の花 一巻

藤

咲く藤花や世間のあはれなり 八条

大音よ花をほそくは流のまは 茶抄

手ようかてしれんてりやうらぬ 史子

脆きろきく木尻なりそこち故 日人
ふち水糸岩ぶら糸たなるとう 風朗

辛夷

山松よつち木きうて辛夷ミ咲 史子
根挿い端硝藏の辛夷ミれ 一冬
いろかりてちさううをせぬ辛夷ミ 久藏

鳥の巢 蚕

吉鳥うてかそゆくんるや巢の鳥 仰天

鳥の巢よ先あ堵す山河川 史子
一松ろし蚕よ糸うう山の冷 風朗
みそに起く蚕と酒は就日哉 一煮
雲よ入る 春れ身 八采
鳥の雲よ入り林おろく溪れ蚕 茶静
おとくく栖をかつたおれのを 八采

春

芍薬と眼よ立あしまの暈 日人

そよくとまよきうを根のま

旧天

まら日も柿のうらを侍い新

久臧

菴ねまらしこまそめて人よま

日人

海側飛子深井ねまや袖の泥

茶静

まうしーまるとらなうぬ畑よ人

ハ茶

春の夕

汎新往畧一高しげふのま

史子

本よ西のいつを帯てあうまれ夕

茶静

暮の春

難釣る池の狭とや昔ねとね

史子

と泥日和りをせなうよまのふん

久臧

流毒よ海まうまねるねな

一色

川下へかまえのまうやまねま

ハ茶

行春

りまや芙蓉よなうし氣の巾

茶静

ゆく春ね一ねよせまうしけい

布

行幸下いつ暇を休まらん小田の露
ゆく春の振師を今長へ度り

素心
久藏



和學圖書
第 6009 号
受入
36. 3. 14
和學圖書
第 6009 号
受入
36. 3. 14
和學圖書
第 6009 号
受入
36. 3. 14
和學圖書
第 6009 号
受入
36. 3. 14

